

マレーシア工科大学 論文作成 WS に参加して

生命環境科学研究科 持続環境学専攻
1年 辻村研究室 榊原厚一

▶ 論文作成 WS の内容

2016年論文作成ワークショップは、マレーシア工科大学のマレーシア日本国際工科院(MJIIT)内(写真1)で行われました。講師には IWA (international water association)会長の Helmut Kroiss 教授や、スウェーデン ルンド大学の Gustaf Olsson 名誉教授等の豪華な講師陣でした。本ワークショップの目的は、アドバイザーや参加者との密な議論を経て、目指すジャーナルへの掲載を達成することでしたが、後述するように、ワークショップを通して目的以上のことが得られたと考えています。

ワークショップ中、常に一貫とした目標に向かっていました。それは、文章やプレゼンテーションで何かを伝えるときには、読み手・聞き手が理解できなければならない。つまり、誰が読むのか誰が聞くのかを考え、場所・場合に合わせて、発表法を変えるということです。難しいことを難しく書き、または発表し、それは、自分にしかわからない。というのは必ず、リジェクト対象となります。

ワークショップは、まず、論文中の各セクションでは何を書くべきか、気を付けることは何かということ、スライドを使用しながら、Olsson 教授が説明し、Kroiss 教授が補足をしていくという形で講義が進められました。参加者からの質問や意見は常にウェルカムであり、講師陣からの一方通行的な講義ではなく、オープンな環境でした。二人の講師の方々のこのオープンな雰囲気作りはとても効果大で、参加者どうしのコミュニケーションに通じ、出身国の違いをはねのけるようなコミュニティができたと考えています。

講義のあとは、論文中の最も重要なタイトルの付け方を2時間以上かけトレーニングを行いました。参加者全員が自分の論文のタイトルを少なくとも3通り考え、どのタイトルが最も良いかを分けられたグループ内で、理由も含め議論するというもの



写真1 ワークショップ会場



写真2 スライド無し2分プレゼン



写真3 スライド有り3分プレゼン

でした。いくつかの例に関しては、講師陣の解説を含め、参加者全員でより良いタイトルを考える取り組みも行いました。

また、写真2、3のように、スライドを使わないで2分、スライドを使って3分の2つのパターンでプレゼンテーションを行いました。自分の論文の最も重要な成果は何か、その成果はなぜ重要かということ、できるだけ専門用語を使わずに、全ての参加者が理解できるようにということを目指に行いました。全参加者がプレゼンテーションを行い、講師陣の方々から全ての参加者に対し、フィードバックをいただけたことは、とても勉強になりました。

最後に、写真4のような、フリー時間がトータルで10時間ほど設けられました。このフリー時間では、参加者が論文について、詰めたところを講師の方々の指導を受けながら、ブラッシュアップするというものでした。論文雑誌のエディターの方々とマンツーマンで指導を受けられた経験は、素晴らしく、全ての参加者が真剣に質問をし、指導を聞き入っている姿が見られました。

図5は、なか日に参加者全員で、市内で食事をした時の集合写真です。参加者の国籍は多岐にわたりました(例えば、マレーシア・日本・台湾・オーストラリア・ケニア)。

▶ 学んだこと

本プログラムを通して、学んだことは、わかりやすく伝えることの重要性を再認識したことです。これまで、私は、「自分がわかりやすい発表」をプレゼンテーションや論文で行ってしまっていたと思います。聞き手は誰なのか、どんなコミュニティーなのかということ、考えずに発表資料を作成してしまっていたということを、反省し改める機会でした。研究室での研究発表・研究雑誌への投稿・学会・一般向け発表では、それぞれベストなスタイル・言葉遣いがあることがわかりました。一つの成果を4,5種類の発表法で発表することの難しさも実感しました。本論文作成ワークショップは、ただ論文が完成すれば良いということではなく、研究者として、どのように自分の成果を公表すべきかということも学べた、素晴らしい機会でした。

論文作成自体については、やはり、異なるバックグラウンドを持つ参加者からの意見が最大の収穫でした。どこがわかりにくいのかというような、自分ひとりでは気づかないところが、見えてきました。その分野に精通していない人の意見は、時にハッとするような結果を生むということがわかり、論文を書くときは、一人で最後まで仕事をするのではなく、時に書いた文章を他人に読んでもらうということも必要であると、考えを改めることができました。最後に、この素晴らしいワークショップに参加させていただき、本当にありがとうございました。



写真4 ワークショップ メインの活動



写真5 集合写真